

「龍の血脈 紹介文」

岡和田晃

新人・小春香子の「龍の血脈」が、「SF Prologue Wave」の『エクリップス・フェイズ』小説企画に参入した。まずは冒頭部をお読みいただきたい。これまでのどの『エクリップス・フェイズ』小説とも違った、ハイ・ファンタジーの香気に驚くはずだ。そう、本作は、ファンタジーとSFの境界が如何にあるかを——あくまでも『エクリップス・フェイズ』の設定を尊重しつつ——問い直す野心的な作品なのだ。

小春が偏愛するアーサー・C・クラークは、「充分に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない」と述べた。このテーマは多くのSF作家の想像力を刺激した。たとえばテッド・チャンは「科学と魔法はどう違うか」というエッセイを著している。小春もまた、この主題に魅せられた者の一人なのだろう。

「Role&Roll」Vol. 113の「宇宙の歩き方」でも紹介されている、火星の芸能ハビタット、エリシウムが今回の舞台だ。そのテーマパークというある意味で閉ざされた舞台で、

オリジナルとフォーク（人格コピー）の葛藤が、柔らかく、繊細ながらも安定感に満ちた筆致で描かれる。そのどこか懐かしい雰囲気は、レイ・ブラッドベリ作品や、J・P・ブレイロック『真夏の夜の魔法』（『夢の国』）にも通じるかもしれない。

ノスタルジックだからといって、自意識に淫して終わらないのも面白いところだ。読み進むうちに、本作には茅田砂胡『スカーレット・ウィザード』や、立原透耶『竜と宙』のような女性作家の手になるストーリー性豊かなジェンダーSF／ファンタジー作品と響き合う批評性があるように思えてくる。

「Sf Prologue Wave」が初の本格的な小説発表の場となる新鋭・小春香子。そのみずみずしい感性を、ここに体感してみてほしい。

小春香子は1984年生まれで、まだ20代の若さである。オリジナルのプレイ・バイ・ウェブのゲームを組織することで文章力を、また会話型RPGの訓練を積むことで物語の構成力を鍛えた。ゲームと教育の接点を、さまざまな角度から考察したレポートを多数発表しており、今後が期待できる逸材なのは間違いないだろう。